

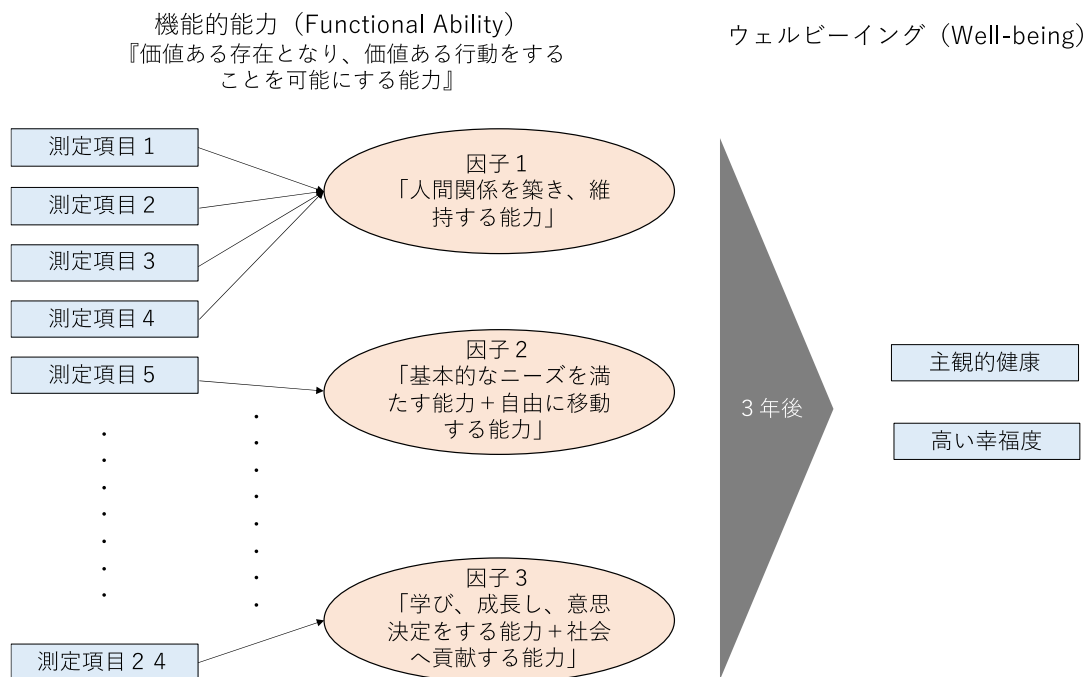
国連が提唱する「機能的能力」が高い人ほど 3年後の健康感と幸福度が高い

～つながる力・生活する力・意思決定し貢献する力などが重要か～

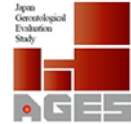
国際連合は、2021 年～2030 年を「Decade of Healthy Ageing(ヘルシーエイジングの 10 年間)」に設定し、世界の人々が健やかに歳を重ねるために必要な機能的能力(Functional Ability)の5項目を提案しています。そこには、以前より重視されてきた「基本的なニーズを満たす力」「自由に移動する力」に加えて「人間関係を築く力」「学び・成長し・意思決定する力」「社会へ貢献する力」という3つの社会的な能力が含まれています。

京都大学大学院医学研究科の近藤尚己教授、西尾麻里沙同博士課程学生らの研究グループは、この「機能的能力」の測定尺度を世界で初めて提案しました。機能的能力の測定尺度を日本の65 歳以上の高齢者約 35,000 人のデータを用いて開発し、最終的に、機能的能力が3つのカテゴリから成る 24 項目で測定できることを明らかにしました。更に、この尺度で測定された機能的能力は、3 年後のウェルビーイング(主観的な健康感と幸福度)を予測することが示されました。これにより本研究は、WHO の提唱した通り、機能的能力が複数のカテゴリから構成され、また将来のウェルビーイングを予測することを示した、初めての研究となりました。

今後は、他の国のデータでも同じ結果が得られるかどうかを検証することで、Decade of Healthy Ageing の世界的な普及に貢献する所存です。本成果は、老年学に関する国際トップジャーナル「Age and ageing」にオンライン掲載されました。



お問合せ先: 京都大学大学院 医学研究科 社会疫学分野 教授 近藤 尚己
kondo.naoki.0s@kyoto-u.ac.jp



■背景と目的

世界保健機関(WHO)が提唱したヘルシーエイジングは、「高齢になってもウェルビーイングでいるための機能的能力(Functional Ability)を養成し、維持する過程」と定義され、機能的能力(「価値ある存在となり、価値ある行動をすることを可能にする能力」)を養成・維持することで Well-being を目指す、とする概念です。国際連合は、2021年～2030年の10年間を「Decade of Healthy Ageing(ヘルシーエイジングの10年間)」に設定し、その進展を表す指標として、機能的能力のモニタリングを各国に促しています。

しかし、機能的能力の測定方法や、その概念的妥当性(WHOの提唱した通り複数のカテゴリで構成されるかどうか)はほとんど検討されていないため、モニタリングの実施は困難でした。そこで本研究は、新たに機能的能力の測定方法を開発し、その予測妥当性(将来のウェルビーイングを予測するかどうか)を検討しました。

■対象と方法

JAGES(Japan Gerontological Evaluation Study, 日本老年学的評価研究)の2013年と2016年調査の両方に参加した35,093名のデータを用いました。まず、理論的に機能的能力を構成すると考えられる31の候補項目を用いて、機能的能力の測定尺度を開発しました(構成概念妥当性)。続いて、その尺度で測定した機能的能力が高い人ほど、3年後の幸福度と主観的健康感が高いかどうか(予測妥当性)を調べました。分析では、年齢、性別、学歴、合併症、等価所得、婚姻状況、生活状況、調査開始時点のwell-beingと機能的能力の影響を取り除きました。

■研究の結論

3因子から成る24項目で機能的能力を測定できることが示唆されました。このようにして測定された機能的能力は、主観的な健康状態と幸福度で測定した、3年後のウェルビーイングを予測することが明らかになりました。

■本研究の意義

本研究は、WHOが提唱する機能的能力の構造や測定方法を検証した世界で初めての研究です。今回の研究成果を受けて、ヘルシーエイジングの考え方が各国で普及し、その達成度を評価したり、国際比較していくといった更なる研究が進むことが期待されます。

■発表論文

Marisa Nishio, Maho Haseda, Kosuke Inoue, Masashige Saito, Naoki Kondo. Measuring functional ability in United Nation's Healthy Ageing: testing its validity using Japanese nationwide longitudinal data. Age & ageing. 2024. <https://doi.org/10.1093/ageing/afad224>

■謝辞

今回二次利用した日本老年学的研究機構(JAGES)のデータを含む本研究は、日本学術振興会(JSPS)、JSPS科研費、厚生労働科学研究費補助金、AMED、科学技術振興機構、笹川スポーツ財団、日本健康増進財団、千葉県健康増進・疾病予防財団、8020推進財団、国立長寿医療研究センター、明治、桜美林大学、新見大学の助成を受けて実施されました。